小児の行動異常と乳児栄養方法との関連に関する研究 ― (1)

木　村　三生夫（東海大学医学部小児科）
杉　森　美代子（　　〃　　）
伊　東　俊　一（　　〃　　）
牧　田　清　志（東海大学医学部精神科）
猪　股　丈　二（　　〃　　）
林　　雅　次（　　〃　　）
篁　　一　誠（　　〃　　）
小　原　啓　枝（　　〃　　）
大　塚　乙　子（神奈川県立厚木児童相談所）

はじめに

近年小児の問題行動が社会問題として大きくとりあげられる事が多い。そうした問題で小児科・精神科を受診するケースも年々増えていることも確かである。さて，これらの問題行動の基盤を考える時，親子関係，特に母子関係のあり方が重視されているが，それは対人関係の基本が早期母子関係の中で形成されると考えられるからである。

本研究では，こうした早期母子関係の重要な部分をになっている母親の授乳行動を中心にして，その様態を行動異常を示す児童について，疫学的に調査し，問題行動との関連を検討しようとしたものである。

対象と方法

1975年2月17日から1980年8月31日までの間に東海大学医学部附属病院精神科外来に受診した児童（0～15才未満）1047名について，問題行動と乳児期の栄養方法に関するアンケート調査を行った。

このアンケート用紙は，①患児に関する質問7項目，②母親に関する質問12項目，③生活環境に関する質問1項目の計20項目からなるものである（表1，2，3）。

この用紙は，養育者宛に郵送し，協力依頼をし，質問に対する回答は郵送によって回収された。今回の調査では，直接の面接法はとらなかった。

結　　果

郵送した1047名のうち回答者327名（32.4%）回答無580名（56.2%），配達不能140名（13.5%）であった。

次に回収されたアンケート項目を次のように整理し，その結果を図1～4にまとめて示した。

(1)診断別分類（図1）　神経症的発症児が全体の32.7%（107名）を占め，次いで自閉症児が29.3%（96名），脳器質障害児が16.8%（55名），精神発達遅滞児10.2%（33名），発達性言語遅滞6.7%（22名），その他4.3%（14名）となっている。

(2)男女比（図1）　男女比では，男児66.7%（218名），女児33.3%（109名）であった。

(3)年令分布（図2）　初診時の年令と，アンケート回収時の年令のずれがあるが，アンケート回収時では14才以上が一番多く21.4%（70名）次いで8～9才が18.7%（61名）となっている。

(4)授乳方法（図3）　母乳栄養，人工栄養，混合栄養を6つに分類した。

(5)産前産後の協力者（図4）　出産前後における協力者の様子を，夫・実父母・義父母・その他に分けて調査した。実父母の協力が夫を上まわり56%（183名）を占め，次いで夫50%（169名）となっている。これらは単一の回答でなく夫と実父母と複数回答をしている人も見られた。全然協力が得られなかったと回答した人が5.5%（18名）居たことにも注目したい。

さて，問題行動の中でも，先天性ないし後天性の脳器質障害に起因すると考えられるものを除い

た情緒因性の問題行動として，神経症的発症と考えられる一群の児童107名について，次のように整理し，その結果を図5～14にまとめて示した。

(1) 年令分布（図5）

(2) 社会的状況（図5）

(3) 産前産後の協力者（図6）

(4) 協力の場（図6）

(5) 分娩の状態（図7）

(6) 妊娠中の状態（図7）

(7) 新生児期の状態（図7）

(8) 授乳者（図8）

(9) 継続的母親代理者の有無（図9） これは図8における母親以外の授乳者4％についての内訳で，いつもきまった人が授乳しているのかどうかを調べたものである。

(10) 離乳状況（図10）

(11) 離乳知識の入手経路（図11） 核家族の構成による影響か育児書によるものが44％（48名）と圧倒的に多く，病院からが21％（23名）家族からの知識は18％（20名）であった。

(12) 離乳開始期（図12）

(13) 離乳完了時期（図13）

(14) 両親の年令・健康状態・学歴・職業（図14）

考　　察

今回のアンケートの調査対象児は，精神科外来へ何らかの行動異常を主訴として受診した児童すべてについて行った。その内訳は，神経症的発症，自閉症，脳器質障害，精神発達遅滞，発達性言語障害，その他（精神病・学習障害・多動児）である。本研究は，乳児期の栄養方法の相異即ち母乳栄養法，人工栄養法その他が，後の児童の行動異常の発生に関連を持つか否かを疫学的に調査しようとしたものである。

従来の調査では，母乳栄養・人工栄養・混合栄養という三分法が使われているが，その内容は多彩で，この三種に分類することは，無理な場合が多い。従って私達は，便宜的に次のような六つの授乳方法の分類を考え，それにもとづいて検討した。即ち①母乳（出生から離乳まで母乳のみですごした），②人工栄養（出生から離乳まで人工栄養のみですごした），③母乳＋人工→人工（出生からある期間を混合ですごし，そのあと人工栄養）④母乳→人工（出生からある期間を母乳ですごしその後人工栄養），⑤人工→母乳（出生からある期間を人工ですごし，そのあと母乳ですごした），⑥母乳＋人工（出生から離乳まで混合栄養），である。

図15は，アンケート対象児と授乳方法の分布をみたものであるが，純粋に母乳のみというのは全体の327名中45名（13.8％），又神経症的発症では19名（17％）と低率である。これに対して純粋な人工栄養も全体では96名（29.4％）とそれ程多くはない。残りはいわゆる混合栄養に分類されるものであるが，その中で母乳が主でそれに人工栄養を補足的に用いたり，母乳から人工栄養へ途中からきりかえていく場合が多く，これらも母乳栄養の範囲内で考えていくと，行動異常を示す子も，厚生省の乳児栄養調査の結果とあまり差はみられない。しかし授乳法の定義が異なるため正確な比較はできない。今回の調査では私達の定めた授乳方法の定義にもとづいた健康児の対照研究がないために，はたして行動異常群，特に神経症的発症児群に何らかの授乳方法の偏りがみられるか否か比較検討することはできない。今後健康児についての同様の調査を行い，今回の結果とあわせて，総合的に検討を加えていくつもりである。

従って今回の研究では，行動異常の発生に授乳方法，特に一般に人工栄養法の普及が，何らかの役割を演じているのではないかという推測がされているが本研究ではそれを疫学的に裏づけるには至っていない。

更に栄養方法の偏りがあるとすれば，それは母親の授乳態度の何を表わすものか今後検討して行く必要がある。

表1.

アンケート用紙

ご記入年月日　昭和　年　月　日

ご記入方法
1. あてはまるものに○をつけて下さい。
2. 必要事項については、ご記入下さい。

お子様についておたずねします。

① 生年月日　昭和　年　月　日生
（現在　満　才と　ケ月）

② 性　別　1. 男　2. 女

③ 家庭内でのお子様の主たる養育者
（ふだん家庭でお子様をみている方）
1. 母　2. 祖母　3. その他

④ 身体発育状況

出生時	身　長	cm
	体　重	g
現在	身　長	cm
	体　重	kg

発育経過	くびのすわり	ケ月
	おすわり	ケ月
	はいはい（這う）	ケ月
	つかまり立ち	ケ月
	ひとり歩き	年　ケ月
	おむつのとれた時期	年　ケ月

⑤ これまでにかかった病気（あてはまれば○はいくつでもつけて下さい。）
1. なし
2. 麻疹（はしか）
3. 風疹
4. 水痘（水ぼうそう）
5. 流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）
6. 百日咳
7. 肺炎
8. 気管支炎
9. 重い下痢、腸炎
10. 外科手術（病名＿＿＿＿）
11. 慢性疾患急性疾患（例えばぜんそくなど）
（病名＿＿＿＿）
12. 自家中毒症（病名＿＿＿＿）
13. その他（＿＿＿＿）
14. 東海大学病院でのお子様の診断名

⑥ ききて　1. 右ききき　2. 左ききき
3. まだわからない

⑦ お子様の現在について
(イ) 通園（学）状況
1. 幼稚園 ］→（イ．毎日通園
2. 保育園 ］　ロ．週　日通園）
3. 学　校 ＿＿小学校＿＿年在学中
＿＿中学校＿＿年在学中
＿＿高等学校＿＿年在学中
4. その他＿＿＿＿
5. 通園（学）していない。
(ロ) 当大学病院以外に受診、相談などされた（されている）機関がありましたらお知らせ下さい。
（例　児童相談所……）
具体的に＿＿＿＿

お母様についておたずねします。
（含、おもに育てた方）

⑧ 妊娠中の身体の状態についてあてはまるものがありましたら期間をぬりつぶして下さい。

表 2.

1. な し (月) 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
2. つわり
3. 不正出血
4. 異常、病気
5. 薬物服用
6. け が
7. 妊娠中毒症
8. 貧 血

⑨ 分娩時の様子

1. 自然分娩
2. 異常分娩
   (1)帝王切開 (2)鉗子分娩 (3)吸引分娩
   (4)早期破水 (5)さかご (6)羊水過多
   (7)羊水嚥下 (8)臍帯異常
   (9)その他 (　　)

⑩ 在胎週数＿＿週と＿＿日

⑪ 出産時入院日数＿＿日間

⑫ 出産場所と期間

1. 病 院 (　) 日間 2. 助産院 (　) 日間
3. 自 宅 4. その他 (＿＿) (　) 日間

⑬ 分娩時間 約 時間 分

⑭ 出産経験 1. 初産 2. 経産 回目

⑮ 新生児の状態 (あてはまれば○印はいくつでもつけて下さい。)

1. 正 常
2. 新生児けいれん
3. ミルクの飲みが悪い
4. 体重の増加が悪い
5. よく発熱する
6. その他お気づきの点 (＿＿＿＿＿＿)
7. 黄疸の程度
   1. 軽い 2. ふつう 3. 重い

⑯ 授乳方法 (どれか1つに○印をつけ、理由をお書き下さい。)

1. 出生から離乳まで母乳ですごした。
   理由 (　　)
2. 出生から離乳まで人工栄養 (ミルク) ですごした。
   理由 (　　)
3. 出生からおよそ (　) 日頃まで母乳とミルクの併用そのあとミルクですごした。
   理由 (　　)
4. 出生から (　日/ケ月) 頃まで母乳そのあとミルクですごした。
   理由 (　　)
5. 出生から (　日/ケ月) 頃までミルクそのあと母乳ですごした。
   理由 (　　)
6. 出生から離乳まで母乳とミルクとを併用した。
   理由 (　　)
   期間 (　日/ケ月) 位

⑰ 産前、産後の協力態勢の有無 (あてはまればいくつでも○印をつけて下さい。)

1. 協力が得られた
   イ. 協力してくれた人
   夫 実 (母/父) 義 (母/父) その他 (　)
   ロ. 協力期間と場所
   自分の家で (　) 日間
   実家で (　) 日間
   その他で (　　) で (　　) 日間
2. 協力が得られなかった
   理由 (　　)

⑱ 授乳環境

(イ) 赤ちゃんの世話 (おもに授乳) をした人はどなたですか。

1. 母
2. 母以外の身内の人
   実 (母/父) 義 (母/父) その他
   理由 (　　)

表 3.

(ロ) ロの方は次の項目にお答え下さい。

1. いつもきまった人が授乳した
2. いつもちがった人が授乳した
3. その他

⑲ 離乳について

1. 離乳を始めた時期　生後（　　）カ月頃
   離乳を完了した時期　生後（　　）カ月頃
2. 離乳はスムーズでしたか
   イ．はい　　ロ．いいえ（理由　　）
   ハ．普通
3. 離乳の方法は、どのような方法で学びましたかお書き下さい。
   （例　育児書、祖母にきいた、病院で学んだ）
   （　　）

⑳ 住居　1. 一戸建住宅
　　2. 集合住宅 (1)鉄筋＿＿階建ての＿＿階 (2)木造＿＿階建ての＿＿階

㉑ 部屋数
　　1. 和室　　室　　2. 洋室　　室
　　3. ダイニングキッチン

㉒ 転居（ひっこし）をしたことがありますか
　　1. なし
　　2. あり（お子様が　　才　　カ月の時）

以　上

生活環境についておたずねします。

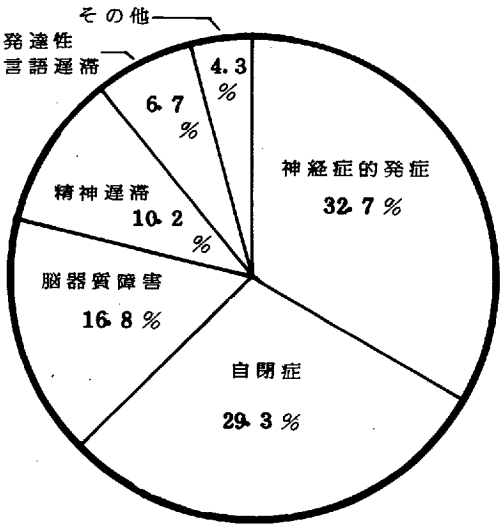
㉓ 家族構成（差しつかえない範囲でお答え下さい。）

	年令	職　業	最終学歴	結婚時年令	性　格（例、陽気・几帳面など）	健康状態・持病
父	才			才		
母	才			才		

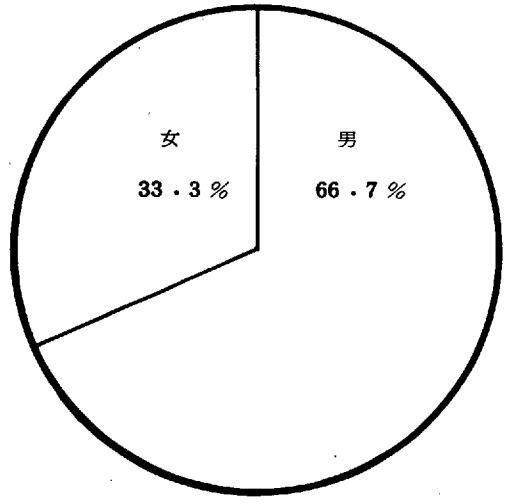
ご協力ありがとうございました。

図 1.　　アンケート回収児（N＝327）

診断別分類



男女比



アンケート回収児（N＝327）の年齢分布

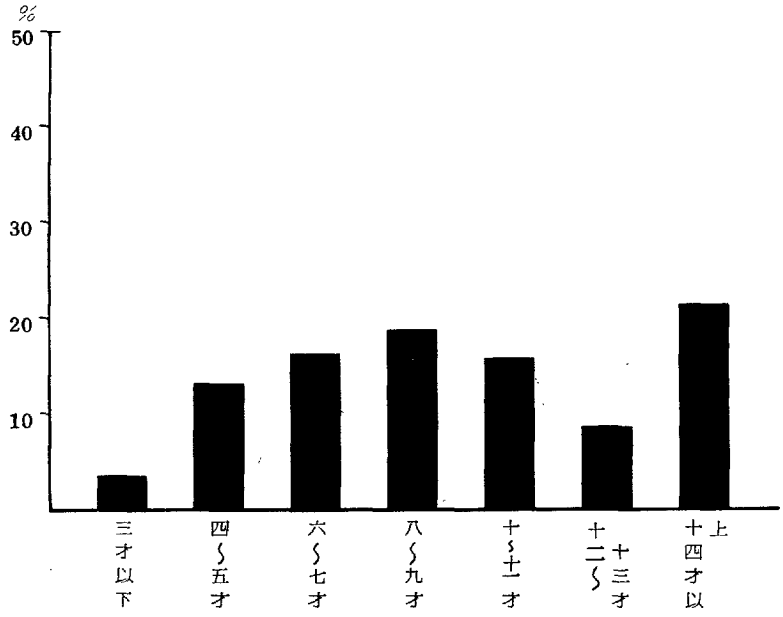


図 2.

アンケート回収児授乳方法

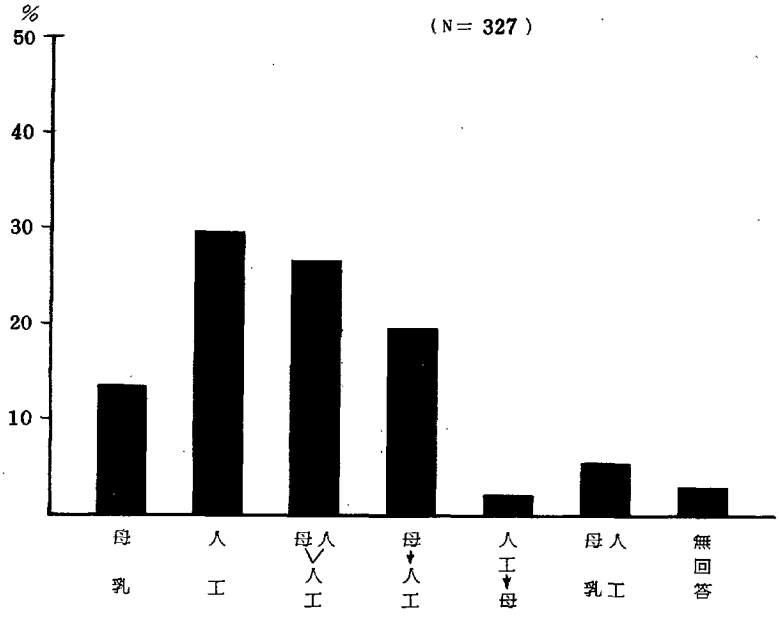


図 3.

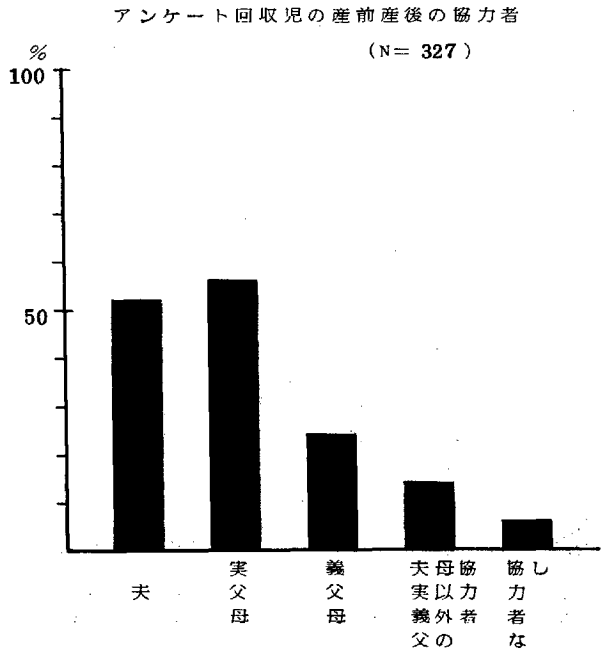

アンケート回収児の産前産後の協力者
(N= 327)
%
100
50
夫
実父母
義父母
夫実義父母以外の協力者
協力者なし

図 4.

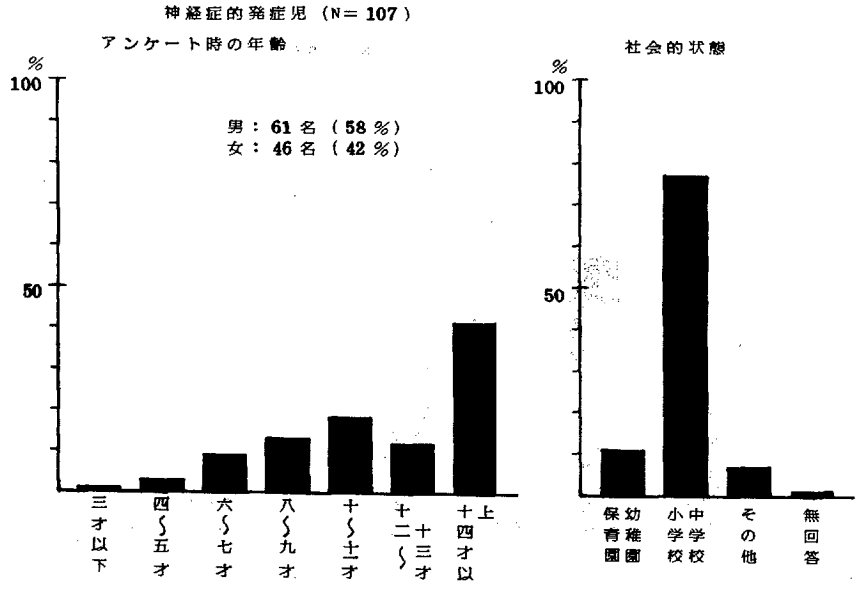

神経症的発症児 (N= 107)
アンケート時の年齢
%
100
50
男: 61 名 (58 %)
女: 46 名 (42 %)
三才以下
四〜五才
六〜七才
八〜九才
十〜十一才
十二〜十三才
十四才以上
社会的状態
%
100
50
保育園
幼稚園
小学校
中学校
その他
無回答

図 5.

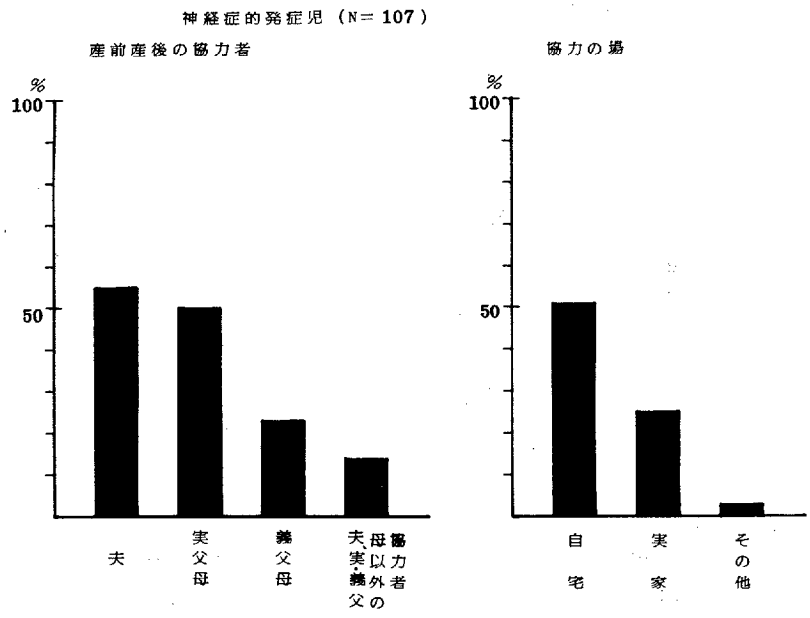

神経症的発症児（N＝107）
産前産後の協力者
協力の場
%
100
50
夫
実父母
義父母
夫・実・義父母以外の協力者
自宅
実家
その他

図 6.

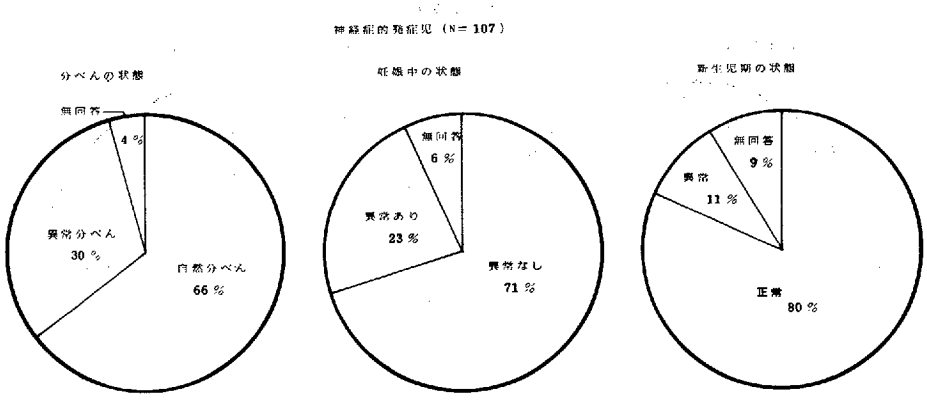

神経症的発症児（N＝107）
分べんの状態
無回答
4 %
異常分べん
30 %
自然分べん
66 %
妊娠中の状態
無回答
6 %
異常あり
23 %
異常なし
71 %
新生児期の状態
無回答
9 %
異常
11 %
正常
80 %

図 7.

神経症的発症児（N＝107）

授乳者

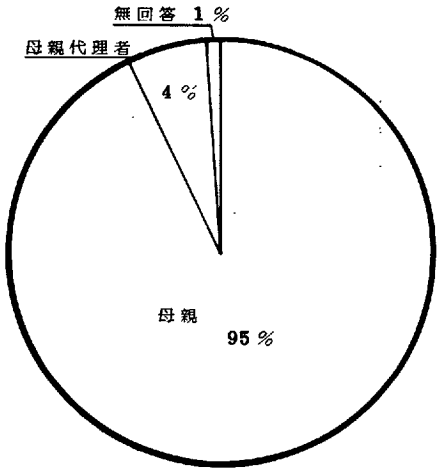


図 8.

継続的母親代理者の有無

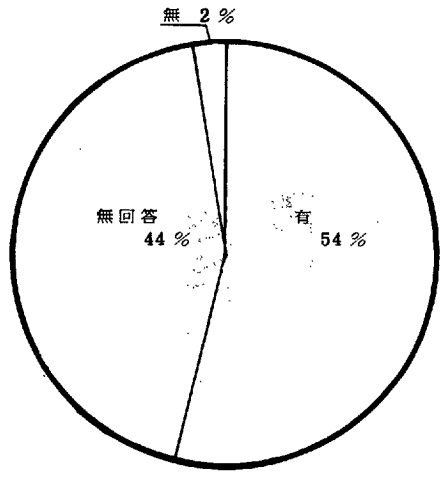


図 9.

神経症的発症児（N＝107）

離乳状況

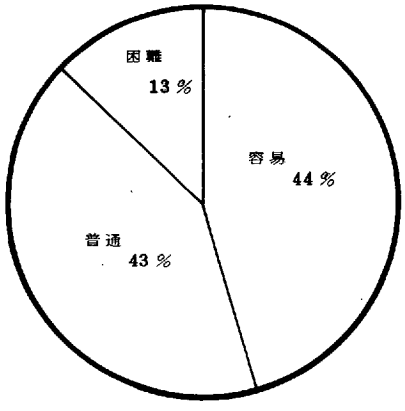


図 10.

離乳知識の入手経路

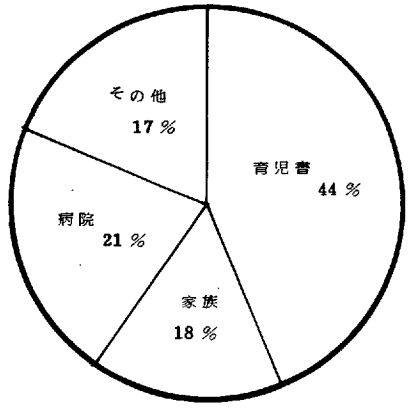


図 11.

神経症的発症児（N＝107）

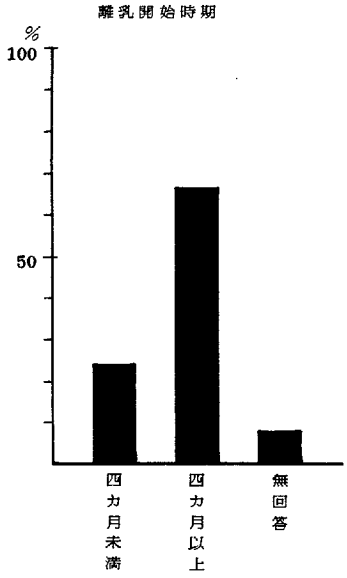


図 12.

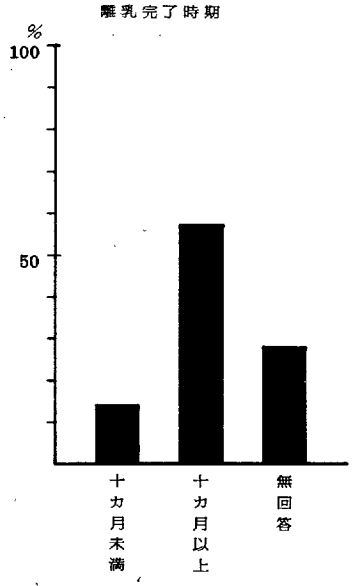


図 13.

神経症的発症児（N＝107）

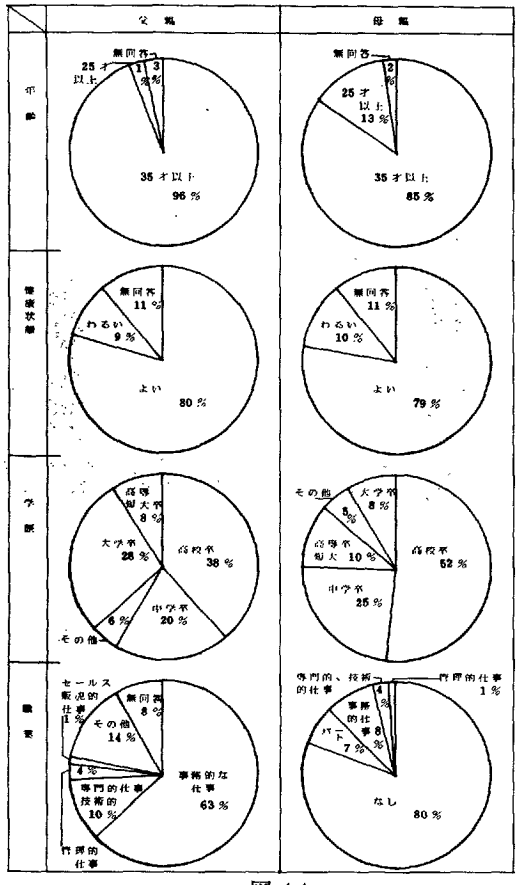


図 14.

アンケート回収児授乳方法

	母乳 (%)	人工栄養 (%)	母＞人 人工 (%)	母→人工 (%)	人工→母 (%)	母乳・人工 (%)	(%)	計
N	19 (17)	21 (19)	28 (26)	25 (23)	0 (0)	7 (6)	7 (6)	107
A	11 (11)	27 (28)	33 (34)	14 (14)	6 (6)	5 (5)	0 (0)	96
O	6 (10)	22 (40)	14 (25)	8 (14)	0 (0)	3 (5)	2 (3)	55
MR	5 (15)	11 (33)	3 (9)	12 (36)	0 (0)	2 (6)	0 (0)	33
DSD	0 (0)	9 (40)	7 (31)	3 (13)	1 (4)	1 (4)	1 (4)	22
その他	4 (28)	6 (42)	2 (14)	1 (7)	0 (0)	1 (7)	0 (0)	14
計	45	96	87	63	7	19	10	327

※ N:神経症的発症児． A:自閉症児． O:脳器質障害児． MR:精神遅滞児．DSD:発達性言語障害児．

図 15.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

近年小児の問題行動が社会問題として大きくとりあげられる事が多い。そうした問題で小児科・精神科を受診するケースも年々増えていることも確かである。さて,これらの問題行動の基盤を考える時,親子関係,特に母子関係のあり方が重視されているが,それは対人関係の基本が早期母子関係の中で形成されると考えられるからである。

本研究では,こうした早期母子関係の重要な部分をになっている母親の授乳行動を中心にして,その様態を行動異常を示す児童について,疫学的に調査し,問題行動との関連を検討しようとしたものである。